



遺跡範囲と竪穴群の位置（黒線内 1977年撮影）

例 言

- 1 本書は平成17年度から平成19年度の3か年に、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した「重要遺跡確認調査」の報告書である。平成17年度は北海道教育委員会の委託を受けて実施した。平成18年度と平成19年度は北海道教育委員会から指定管理者の指定を受けて実施した。
- 2 今回調査を行った音類堅穴群は、北海道天塩郡幌延町に所在する。
- 3 調査は財団法人北海道埋蔵文化財センター第1調査部普及活用課および同部第1調査課が担当した。
- 4 報告書の作成は、村田 大が編集を担当し、各執筆分担者は文末に名を記した。
- 5 関連資料の整理は藤井 浩が行った。
- 6 関連資料の写真撮影は第2調査部第3調査課の中山昭大が行った。
- 7 現地調査にかかり、基準点測量、地形測量等の業務を株式会社シン技術コンサルに委託し、測量成果について報告書に掲載した。
- 8 調査にあたり、下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。
環境省自然環境局稚内自然保護官事務所、北海道森林管理局留萌北部森林管理署、北海道留萌土木現業所、北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課、幌延町、幌延町教育委員会、幌延町農業協同組合、日高町教育委員会 川内谷 修、登別市 街道重昭、天塩町 水口日出男、幌延町 足達純也 作業員：加藤 享、加藤清美、足達朋子、藤門明美、宮下麻奈美、新井智美

記号等の説明

- 1 呼称について
本文および図中で使用する主な呼称の意は、以下のとおり。
「林班保安路」：営林署が国有林を維持管理するため、刈り払いが行われた道。踏査中の主な移動経路として利用した。
「林班杭」：上記の道に営林署が設置した杭。尾根上の踏査および確認した堅穴の位置確認等に利用した。杭名は「E○○」と記す。
「刈分け道路」：昭和20年代に浜里地区から下沼地区へ行くために刈り払いが行われた道。道跡への進入路として利用した。
「開拓道路」：戦後開拓の際、開削された道。現在は使用されていない。確認した堅穴群の位置確認に利用した。
- 2 堅穴規模の文中・表中で表現について
踏査中に確認した堅穴は現地目測による規模を記録した。ただし、笹原等植生の違いなどにより同条件での記録ではないため規模の目安程度の認識である。おおむね以下のように分けている。平面規模の区分は、1辺2m以下を「極小型」、2～3mを「小型」、3～5mを「中型」、5～10m「大型」、10m以上「特大型」、深さは0.3m以下を「浅い」、0.4～0.5mを「やや深い」、0.6m以上を「深い」とした。
- 3 関連資料について
掲載図の縮尺は復元個体、拓影図ともに1：3である。

目 次

カラー図版 例言・記号等の説明 目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	2
4 音類堅穴群の調査歴	2
5 予備的調査	6
6 調査の方法	8
7 調査結果の概要	10

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の立地と環境	13
2 周辺の遺跡	15

III 確認した遺構の現況

1 堅穴群の現況	17
2 チャン跡の現況	34

IV 関連資料

1 表採資料	45
--------------	----

V 調査の成果と今後の課題

1 調査成果について	47
2 今後の調査予定について	47

引用・参考文献

写真図版

- ・現地調査状況
- ・関連資料

報告書抄録

付図：音類堅穴群堅穴位置図（5000分の1）

大曲地区堅穴現況位置図（500分の1）

1号チャン地区堅穴現況位置図（500分の1）

挿図目次

図Ⅰ-1 遺跡の位置	図Ⅲ-2 大曲地区堅穴位置図
図Ⅰ-2 平成16年度予備的調査の調査地区	図Ⅲ-3 1号チャシ地区堅穴位置図
図Ⅰ-3 調査区設定図	図Ⅲ-4 2号チャシ地区堅穴位置図(継続測量中)
図Ⅰ-4 移動の経路等	図Ⅲ-5 「音類1号チャシ跡(仮)」地形測量図
図Ⅱ-1 遺跡周辺の地形	図Ⅲ-6 「音類2号チャシ跡(仮)」地形測量図(継続測量中)
図Ⅱ-2 周辺の遺跡	図Ⅳ-1 表採資料 土器
図Ⅲ-1 確認した堅穴群	

表目次

表Ⅰ-1 地区別堅穴群一覧	表Ⅲ-1 堅穴現況一覧
表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧	

写真図版目次

カラー図版1	1 堅穴の状況(大曲地区)
遺跡遠景(観延ビジターセンターより)	2 堅穴の状況(大曲地区)
サロベツ川	図版8 (平成16年度 予備的調査)
カラー図版2	1 元天塩高等学校教諭 街道重昭氏
遺跡範囲と堅穴群の位置	2 日高町教育委員会 河内谷修氏
図版1	図版9 (平成16年度 予備的調査)
1 遺跡遠景(観延ビジターセンターより)	1 堅穴の状況(大曲地区)
2 サロベツ川	2 堅穴の状況(音類橋北側)
図版2	図版10 (平成17年度 本調査)
1 遺跡の空中写真(1947.10.9米軍撮影)	1 大曲地区近景(サロベツ川より)
図版3	2 大曲地区の様子
1 遺跡の空中写真(遺跡北側 1964撮影)	図版11 (平成17年度 本調査)
図版4	1 堅穴の状況(大曲地区)
1 遺跡の空中写真(遺跡南側 1964撮影)	2 「大曲地区」堅穴測量状況
図版5	図版12 (平成17年度 本調査)
1 進入路、移動経路等の位置	1 堅穴の状況(大曲地区)
図版6 (平成11年度 予備的調査)	2 堅穴の状況(大曲地区)
1 遺跡標柱	図版13 (平成17年度 本調査)
2 堅穴の状況(大曲地区)	1 「音類1号チャシ跡(仮)」サロベツ川側境の状況
3 堅穴の状況(大曲地区)	2 「音類1号チャシ跡(仮)」日本海側境の状況
図版7 (平成15年度 予備的調査)	図版14 (平成17年度 本調査)
	1 GPSによる測量基準点の設置

2 林班保安路の状況

図版15 (平成18年度4月 現地確認)

- 1 雪解け時のサロベツ川 (大曲地区)
- 2 雪解け時の湿原 (H17-9 地区付近)

図版16 (平成18年度4月 現地確認)

- 1 堅穴の状況 (大曲地区)
- 2 堅穴の状況 (大曲地区)
- 3 堅穴の状況 (大曲地区)

図版17 (平成18年度4月 現地確認)

- 1 「音類1号チャシ跡 (仮)」サロベツ川側堤防の状況
- 2 「音類1号チャシ跡 (仮)」日本海側堤防の状況

図版18 (平成18年度 本調査)

- 1 堅穴の状況 (H18-5 地区)
- 2 堅穴の状況 (1号チャシ地区)

図版19 (平成18年度 本調査)

- 1 堅穴の状況 (H18-6 地区)
- 2 大曲地区崩落地の状況

図版20 (平成18年度 本調査)

- 1 「音類2号チャシ跡 (仮)」の状況 (中央のシダ類が生えていない直線状の部分)
- 2 「音類2号チャシ跡 (仮)」からサロベツ川方向を見る

図版21 (平成18年度 本調査)

- 1 開拓道路の状況 (H18-7 地区と H18-8 地区の間)
- 2 林班保安路の状況 (6000区)

図版22 (平成19年度4月 現地確認)

- 1・2 「音類2号チャシ (仮)」の状況 (手前から人の方
向へ堤防のびる)
- 3 「音類2号チャシ (仮)」の状況 (画面右下から左上方
向へ堤防のびる)

図版23 (平成19年度4月 現地確認)

- 1 堅穴の状況 (H18-10地区)
- 2 堅穴の状況 (H18-11地区)

図版24 (平成19年度 本調査)

- 1 堅穴の状況 (H18-6 地区 No0506)
- 2 堅穴の状況 (H19-2 地区 No1149)

図版25 (平成19年度 本調査)

- 1 遺跡周辺の地形調査状況
- 2 2号チャシ地区の詳細地形測量状況

図版26 (平成19年度 本調査)

- 1 刈分け道路の状況

2 開拓道路の状況 (4000区)

図版27 (平成19年度 本調査)

- 1 幌延町浜里堅穴群遠景 (天塩川対岸の砂丘上)
- 2 天塩町天塩川口遺跡の状況

図版28 (平成19年度 本調査)

- 1 豊富町豊里遺跡遠景 (中央の建物付近が堅穴密集地区)
- 2 稚内市オネトマナイ左岸チャシ跡 (橋の向こう側に堤防が見える)

図版29 (平成19年度 本調査)

- 1 浜里小中学校跡
- 2 稚内市より利尻をのぞむ

図版30 関連資料 表採資料 土器①)

- 1 甕形土器
- 2 高坏形土器
- 3 埴形土器

甕形土器炭化物付着状況

埴形土器同一個体破片

図版31 関連資料 表採資料 土器②)

破片資料

I 調査の概要

1 調査要項

調 査 名：重要遺跡確認調査

調査対象遺跡：幌延町音類堅穴群遺跡（北海道教育委員会登録番号 G-09-1）

遺跡の所在地：天塩郡幌延町字浜里188ほか 国有林174～175林班

調 査 期 間：平成17年10月3日～10月21日

平成18年10月2日～10月20日

平成19年10月1日～10月19日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

平成17年度

理 事 長 森重 楯一

専 務 理 事 宮崎 勝

常 務 理 事 佐藤 俊和

総 務 部 長 牧野 義則

第1調査部長 千葉 英一

普及活用課課長 田中 哲郎

主 任 藤井 浩

第1調査課主査 立川トマス

平成18年度

理 事 長 森重 楯一

専 務 理 事 佐藤 俊和

常 務 理 事 専務理事兼務

総 務 部 長 松本 昭一

普及活用課課長 村田 大

主 任 藤井 浩

第1調査課主査 立川トマス

平成19年度

理 事 長 森重 楯一

専 務 理 事 佐藤 俊和

常 務 理 事 畑 宏明

総 務 部 長 松本 昭一

普及活用課課長 村田 大

主 任 藤井 浩

第1調査課課長 田口 尚

第1調査課主査 花岡 正光

予備的調査

平成11年度 普及活用課課長 越田賢一郎、同課主任 愛場 和人

平成15年度 普及活用課課長 越田賢一郎、同課主任 藤井 浩

平成16年度 普及活用課課長 越田賢一郎、同課主任 藤井 浩

調査協力者：街道 重昭（元天塩高等学校教諭）、日高町教育委員会 川内谷 修

3 調査に至る経緯

北海道教育委員会では、第3次教育長期総合計画において、文化財の調査・保存・活用の中に、埋蔵文化財包蔵地の的確な把握と周知、重要遺跡の調査と保存・活用の推進を基本的方向として示し、個別事業として重要遺跡確認調査を位置づけた。その事業内容は、「重要な遺跡を保護（現状保存）するため、開発行為に先だって測量や試掘等の調査を行い、遺跡の範囲や性格等を把握し、国や道等の史跡に指定して周知を図ることとともに環境整備を促進し活用を図ること」としている。

そのような中、「北海道立埋蔵文化財センター（仮称）建設基本構想委員会」では道立センターの業務内容について検討を行い、調査研究機能の中に「道内に所在する埋蔵文化財包蔵地のうち重要な遺跡を選定し、測量調査・試掘調査等を行い、遺跡の状況・範囲・性格等を把握する重要遺跡確認調査」を実施することが位置づけられたことから、平成11年の道立センター設置以来、この事業を行ってきた。

重要遺跡確認調査の方法は、対象地域（史跡指定候補地）の1/1000測量図を作成する測量調査、遺跡の範囲、性格、内容の把握を目的とする試掘調査、および報告書作成である。調査対象とされた50遺跡のうち、I期5遺跡（余市町西崎山環状列石、奥尻町青苗砂丘遺跡、函館市恵山貝塚、幌延町音類堅穴群、上士幌町13の沢遺跡）で、調査可能な遺跡から順次実施するものとし、平成11年度に各地元教育委員会と調整を行い、現地確認および準備作業を行っている。

確認調査は、平成12年度に小樽市・余市町所在の西崎山ストーンサークル、平成13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、平成15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚で実施した。幌延町音類堅穴群については、平成11年度以降に地元調整と予備的調査を行い、土地所有者および幌延町・同町教育委員会の協力を得られる見込みとなったことから、平成17年度から調査を開始した。全体を5か年で行う予定である。

（村田）

4 音類堅穴群の調査歴

これまでに、確認できる音類堅穴群に関わる調査等は以下のとおりである。

昭和39年7月	早稲田大学桜井清彦氏らが一部発掘調査。
昭和41年	北海道大学大場利夫氏らが中央部踏査。
昭和42年	北海道大学大井晴男氏らが堅穴群北部踏査。
昭和45年11月	札幌大学石附喜三男氏、天塩高校街道重昭氏らが踏査。
昭和50年8月4日	石附喜三男・街道重昭氏らが踏査。
昭和56年5月21日	石附喜三男・街道重昭氏らが北部踏査。
昭和59年7月	北海道教育委員会・幌延町教育委員会が「一般分布調査」で現地踏査。
平成7年6月	幌延町教育委員会が大曲地区に「音類堅穴群遺跡」の標柱設置。
平成7年11月	文化庁井上和人調査官、北海道教育委員会田才雅彦ら分布調査。

これらの調査のうち、主なものについて概要を述べる。

昭和39年の早稲田大学桜井氏らの発掘は、『日本考古学協会年報17』の中で「北海道幌延町浜里A地点遺跡」（桜井 1964）として報告されている。「遺跡は、浜里小・中学校から北へ約4kmほど海岸に沿って水口牧場に至り、ここから東へ3km入った砂丘上にある。」とあるので、今回踏査したもの

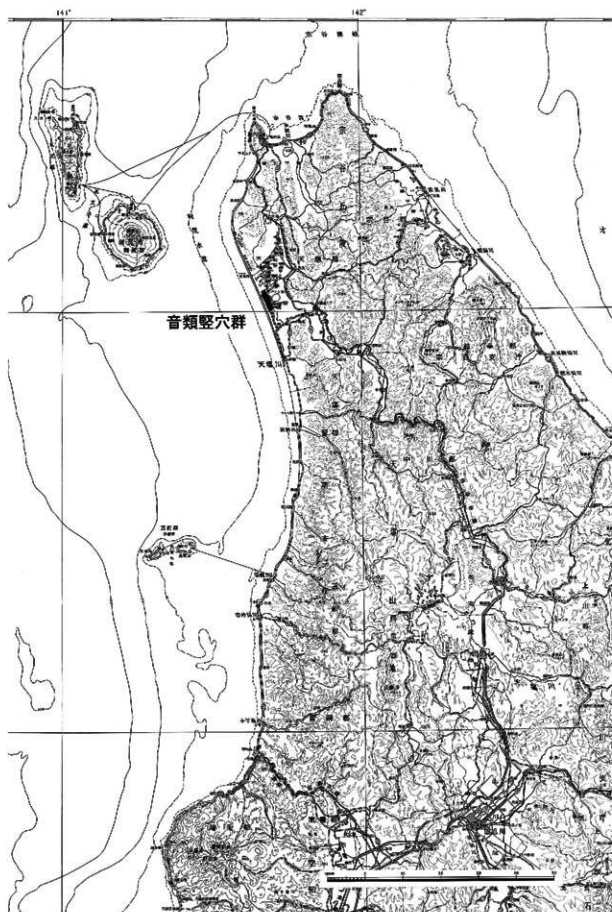


図 I-1 遺跡の位置 (この図は国土地理院発行50万分の1地方図「北海道I」を複製、加筆したものである) ×0.5

のうち「5000区」（調査区の設定に関しては1章6節参照）で確認された堅穴群のいずれかであると考えられる。16個の堅穴を確認し、このうち3個（1・2・4号址）を発掘しており、いずれも一辺4～5mの方形で、カマドを持つ住居であると記載している。この調査で出土した資料は、近くの浜里小・中学校（図版29-1）に保管されていたが、廃校に伴いその所在は不明である。

昭和41年の大場らの調査、昭和42年の大井らの調査、昭和45年の石附・街道らの調査については「幌延町史」第3章「幌延町の古代」（大場 1974）に記載がある。昭和45年の石附・街道らの踏査では「海岸線に沿って延々6kmに亘って堅穴住居跡の分布が認められた」とあり、遺跡範囲全体に堅穴住居跡と考えられるくぼみが分布していると思われる。

石附とともに踏査に参加した、街道重昭氏の「調査メモ」によると、両氏はその後、昭和50年と56年に踏査を行っている。昭和56年の踏査の記述は、今回の調査で「大曲地区」と呼称した地区を示した箇所に「昭和56年5月21日、音類橋からしじみ舟で遡上。高さ2段の両方の段丘に堅穴密集、ただ驚き。上陸地点から遺物散布、崩落したものか」とある。「高さ2段の両方の段丘」とは、大曲地区（「大曲地区堅穴現況図」参照）の中央の低位部を挟んだ、北側と南側の尾根部分のことか。「上陸地点から遺物散布、崩落したものか」は、サロベツ川右岸の攻撃面にあたる箇所、Na0045・0046付近（写真図版19-2）と考えられる。

平成7年に、幌延町が設置した標柱（写真図版6-1、10-2）は、大曲地区Na0087付近にある。

昭和40年代から現地を度々踏査し、平成16年度の予備的調査に協力していただいた街道重昭氏はその著作の中で、当時の踏査の様子や遺跡の立地する環境等を紹介されているので、抜粋して引用させていただく。

（村田）

「サロベツ」ノート　水を抜かれた原野は—
かいどうしげあき

昭和四十四年のことだった。サロベツ原野の中に、先住民の堅穴（昔の人の、半地下式の住居跡と考えられている）があるということを知ったので、その分布や形状を見てこようと出かけた。サロベツ原野のような立地条件を持つ堅穴とは、一体どんなであろう。半信半疑であった。しかし、その堅穴の数は、一つや二つではなく、集落としてあるというから、好奇心が騒いだ。

幌延町教育委員会に行き、五万分の一図で現地を教えてもらったら、なんと、サロベツ川の西岸に、エンピツで、長楕円の印を大きく、無造作につけるではないか。そうでなくとも不案内な土地、もう少し厳密な地点をと、お願いした。すると、「この範囲全体が、その遺跡なのです」という。あ然とした。大ざっぱに測ってみると、南北の長径六キロにも及ぶではないか。この六キロの範囲に、どのくらいの密度で堅穴が分布しているのだろうか。さっそく出かけた。道らしい道は、けもの道のような林道ぐらいしかないこと、戦後入植した人々の道路は、すでに草に帰っていることなど知らされていたが、六キロにも及んでいるなら、射程距離に立ち入ることさえできれば、どこかに当たるだろうぐらいに考えていた。しかし、一日中、落日まで、砂丘や湿原をさまよい歩いたが、とうとう堅穴のくぼ地には達することができなかった。かん木や原生林、地図に載っていない湖沼などに妨げられ、疲れはてて、ぬかるみから敗走したのだった。水と陸の区別が明確でない、サロベツ原野の大きさに翻弄されただけであった。

—中略—

エゾスカシユリやカンゾウやヒオウギアヤメの緋色や黄や紫が鮮やかな今年の六月下旬、とうとう、念願の堅穴の位置に立つことできた。

サロベツ川の西岸、低い丘陵性の舌状台地には、おびただしい数の堅穴が群をなしている。その分布は、南は、下沼—音類線の道の背後からすでに始まり、北はベンケ沼の水が、サロベツ川に合流する地点までの六キロと幌延町教育委員会が教わったが、ほぼ違いないと思われる。踏査できたのは、この間、二キロに満たない範囲なので、確実な広がりについては自信がない。ただ、この堅穴の分布している丘陵性の台地は、さらに北へ、また南へと伸びているから、その分布は、まだまだ拡大されそうである。何千という堅穴群にまちがいない。しかも、それが、現代文明の洗礼を受けない無垢の形で……。

堅穴はゆるやかな傾斜をもってサロベツと対する、東面した台地上に、数十個ずつぎっしり集まっている。堅穴のくぼみ方は、時間の推移を示して、いくらか鈍くなっているものの、落ち込みは深く、一見して、すぐ堅穴とわかる。大きさは、管内のこの種の堅穴と同様、径五メートルぐらいであろうか。この堅穴を造った先住民族は、その出土品から、アイヌの祖先の樺文時代の人々が中心であろうと考えられている。それにしても、このような広い地域にわたって堅穴が分布している事実、まず驚かされる。そして、この何千に及ぶかしない堅穴の造営と生活が、すべて同時に展開されたものでないにしろ、このサロベツ原野の、まさしく「サロベツ」の、まったく中で生活していたエネルギーに嘆息せざるを得ない。サロベツ原野の「サロベツ」の語源はアイヌ語で、「湿地川」の意味である。しかし、その湿地川も、厄介者としてのそれではなく、彼らにとっては、生活に不可欠な舞台であった。サロベツに雄飛した人々にとって、農耕民族の子孫の驚愕など、奇異に感じるにちがいない。

「留萌文学」第45号 街道重昭 昭和46年12月25日発行

天塩ノート —ミズナラのことなど—

かいどうしげあき

天塩地方の先住民の住居跡をさがすメルクマールは、砂丘を覆うように繁茂する、背の低い林に分け入ってみることである。海と陸を区分するように、背の低い林が、ときれときれ連なっている。遠くからながめる限り、それは、一見、地苔類のようである。しかし、近づくと、見紛うことがない、明らかに木の集合体である。地べたを這い、曲がりくねり、節くれだった、過剰なまでに身構える樹相に、ただ恐れいってしまうのだが。

—中略—

林の中で先住民の住居跡をさがし、夢中でさまよっているうちに、まるで投網を仕掛けられたように、にっちもさっちも身動きしなくなることがある。林の頂上部をいつも掠める潮風で、樹冠は伸び悩み、脇枝ばかりが発達するからだろうか、枝々が絡みつくように密生するナラは、ささくれだった樹皮とともに、壮絶な風景をくりひろげている。進退きわまったら、大してあがかず、木に登るといい。取っかかりが多いし、登るのはたやすい。林は東西の分布は薄っぺらで、位置は苦もなく確かめられる。ただ、不意に体重をかけた枝が、ごくもろく折れることがある。体重を支える手ごろな太さがあり、若く、滑らかな枝でも、中空で脆く、見かけ倒しのものが多いのだ。

「留萌文学」第68号 街道重昭 昭和59年6月15日発行

5 予備的調査

音類堅穴群のこれまでの予備的調査については、以下のとおりである。

・第1回予備的調査（写真図版6）

平成11年9月22日 担当者：普及活用課長 越田賢一郎、同課主任 愛場和人

地元教育委員会と打合せを行う。現地確認は、音類橋より舟で遡上し、大曲地区の踏査を行っている。

・第2回予備的調査（写真図版7）

平成15年6月27日 担当者：普及活用課長 越田賢一郎、同課主任 愛場和人

地元教育委員会と打合せを行う。海側から遺跡への進入路を確認した。

・第3回予備的調査（写真図版8・9）

平成16年6月21日～24日 担当者：普及活用課長 越田賢一郎、同課主任 藤井 浩

地元教育委員会と打合せを行う。現地踏査を行った。

平成16年度については、音類堅穴群を以前踏査して現地に詳しい街道重昭氏（元天塩高等学校教諭）、川内谷修氏（日高町教育委員会）の協力を得ている。

踏査は遺跡の北部と音類橋付近を中心に行った。以下に踏査の概要を記す。地区名は調査時の仮称である。

「三角点」（松が丘）地区：梶延町と豊富町の町境付近で、約30軒の堅穴を確認した。1辺6～10mの大型のものが多く平坦面に立地する。

「大曲」地区：サロベツ川が大きく蛇行する右岸段丘上に立地する。約300軒を確認した。1辺5m前後のものがほとんどで、深さは1～2m程のものが多く。

「16杭」地区：北東から南西方向に細長く延びる砂堤上で堅穴を1軒確認した。

「19杭」地区：北東から南西方向に細長く延びる砂堤上に立地。1辺5～6m程のやや大型の堅穴19軒を確認した。南西側にさらに続いている。

「24杭」地区：標高約7.5mで「19杭」より約200m南側に1軒の堅穴を確認した。1辺5m長である。

「12杭」地区：標高8～9m程で「16杭」と「8杭」地区の間で3軒の堅穴を確認した。1辺5m長である。

「8杭」地区：「三角点」地区と「12杭」地区の間の標高約10m付近で3軒の堅穴を確認した。1辺5m長である。

「音類橋北側」地区：東側にサロベツ川と湿原をのぞむ砂丘上に立地。20軒の堅穴を確認した。1辺4～5mで深さは1m前後のものが多く。

「音類橋南側」地区：東側にサロベツ川と湿原をのぞむ砂丘上に立地。遺跡範囲外であるが、1辺4～5m長の堅穴数軒を確認した。

これらを平成17年度以降の本調査の所見と比較した結果は以下のとおり。

「三角点」（松が丘）地区で確認された堅穴の大半は豊富町側に位置する。

「大曲」地区とした範囲で確認し位置を記録した堅穴は190軒である。

「16杭」地区は、「H17-7地区」で確認した7軒の堅穴のうち、林班保安路に最も近いNa0235が相当すると思われる。



図 I-2 平成16年度予備的調査の調査地区

「19杭」地区は、「H17-9 地区」で確認した堅穴群に相当する。

「24杭」地区の1軒は、「H18-3 地区」で確認した10軒の堅穴のうち、林班保安路に最も近いNa0397が相当すると思われる。

「12杭」地区の3軒は、「H17-4 地区」のNa0134～0136の3軒に相当する。

「8杭」地区の1軒は、「H17-3 地区」で確認した2軒の堅穴のうち、林班保安路に近い堅穴番号0278と考えられる

「音類橋北側」地区に相当する範囲は、平成20年度以降に踏査する予定である。(村田)

6 調査の方法

調査は以前から存在が知られている「大曲地区」がある北側から踏査を始め、堅穴群全体の表面踏査により堅穴群の分布範囲と軒数の把握、また測量により位置を記録することおよび堅穴が特に集中する地区を選択し、詳細な分布図を作成することを主な目的とした。

堅穴群は、「利尻礼文サロベツ国立公園」の特別保護地区であり、大半が国有林内にあることから、環境省稚内自然保護官事務所、留萌北部森林管理署天塩支所、北海道留萌土木現業所と事前に連絡調整を行ったほか、堅穴群および進入路の土地所有者の承諾、近隣砂採取事業者の協力を得ながら調査にあたった。また、現地地籍データの提供や作業員の募集については、幌延町役場・幌延町教育委員会の様々な協力を得ている。

調査区名称は、公共座標を1kmごとのX軸線で区切り、X座標の6桁の値の内、下4桁(南から2000区・3000区・4000区・・・)を符丁として用いた。これはあくまで、図上の便宜的呼称として用いている。(図I-3)

確認した堅穴群は、原則「確認年—確認番号」を「地区名」として整理した。例えば「H17-1 地区」は、「平成17年度調査で確認した1番目の堅穴群」となる。一部「大曲地区」など以前からの呼称や「1号チャシ地区」など地区の特徴を用いた地区名がある。なお堅穴群の地区名は、同じ尾根で確認されたものや作業上便宜的に付したものであり、堅穴群ごとの性格を表すものではない。確認した堅穴は、「Na0000」のように4桁の数字を付した。

道跡範囲への進入は、予備的調査で確認した、昭和20年代に開削された「刈分け道路」を利用した。この道路については、「幌延町史」に次のような記述がある。「幌延村に属していたが、サロベツ川にさえぎられ、かつサロベツ原野の湿原に封じられていたから、オトンルイの人たちは経済的に天塩村に依存していた。第2次大戦後に、開拓者が入ってから、昭和24年ころはじめて、パンケ沼の附近のサロベツ川に吊橋をかけて下沼に通ずる刈分け道路がつくられたが、それまでは役場からオトンルイに行くには、天塩町へ行き川口渡船を渡っていくという不便なことであった。」道路は昭和24年ころつくられたとあるが、昭和22年米軍撮影の空中写真(図版2-1)でサロベツ川にかかるつり橋が確認できるので、これ以前につくられたものであろう。

踏査にあたっては、堅穴群の西端および中央部を縦走している営林署の林班保安路を主な移動経路として利用した。また現地の砂丘地帯は地形的変化が乏しく、目印となる対象物が無く、沼沢地がいたるところにあるため、堅穴位置を明確に地形図上で把握できない状態であった。そのため営林署から入手した「留萌森林計画区留萌北部森林管理署基本図62および63 1/5000図」に記載のある林班杭を目安に、北東から南西方向へ延びる砂丘上の踏査を行った。

踏査により確認した堅穴位置の記録には、携帯型GPSを用いた。携帯型GPSの精度は、受信する衛星の数や樹林の様相等で、最大10数メートルの誤差が生じるが、「幌延町地形地番合成図1/5000」

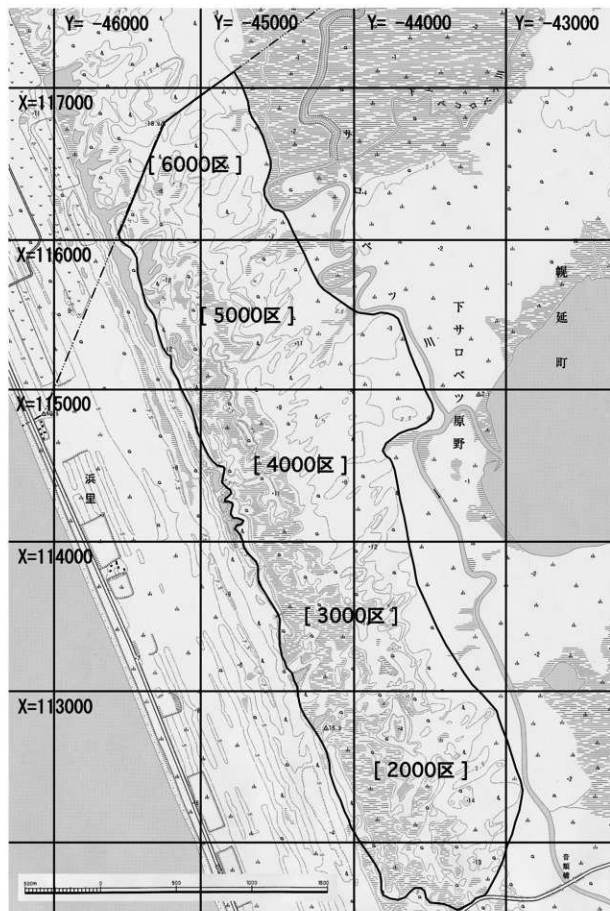


図 I-3 調査区設定図 (この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「稚内」を複製、加筆したものである) × 1

図への位置および範囲を記録することを目的としたため使用した。

堅穴密集地区の詳細測量と取得した堅穴データの公共座標への変換および図上への図化作業は、測量会社へ委託した。

詳細測量は「大曲地区」、「1号チャシ地区」、「2号チャシ地区」について行った。「2号チャシ地区」の測量作業は、平成20年度に継続して行う予定である。(村田)

7 調査結果の概要

平成17年度の調査

遺跡の北側にあたる6000・5000・4000区の表面踏査を実施し、15か所の堅穴群を確認した。数十の堅穴が集まる大規模な堅穴密集群のほか、単独または10軒以下で構成される小規模の堅穴群が点在し、確認できた堅穴の総数は約450軒であった。堅穴密集地域の堅穴測量は、6000区の「大曲」の名称で古くから知られていた地域を対象として実施した。GPSによる測量基準点を利用し、トータルステーションによりデータ管理、作図を行っている。大曲地区の90軒について終了した。なお、GPSによる基準点の設定は、測量会社に委託して行っている。

調査区全域で林班保安路を主な移動経路として使用できることを確認した。

また、4000区の堅穴群地域では、2本の壕間が45mほどのチャシ跡が新たに発見された。

平成18年度の調査

平成17年度の調査では、主に担当者1名が踏査、もう1名が測量作業を行っていたが、踏査範囲が広大なため、主な担当者2名が地区を分担して踏査を行った。踏査地区は6000・5000・4000区である。

平成18年度の調査から、踏査により確認した堅穴群に地区名を付し、堅穴位置の記録に携帯型GPSを使用した。位置を記録した堅穴数は、平成17年・18年度分を合わせて574軒で、確認した堅穴群は28か所である。

堅穴群は、砂丘列の北東側(サロベツ川側)に多く分布する。「大曲地区」を中心に6000区が多く、サロベツ川から砂丘列が離れる5000区では分布が減るが、川が蛇行して近づく4000区から堅穴が増える傾向がうかがえる。また、4000区では今まで堅穴が存在しないと考えられていた、砂丘列の南西側(日本海側)で3か所の堅穴のまとまりを確認した(「H18-9・10・11地区」)。堅穴群は尾根上だけではなく、湿地にいたる低位部にも分布が広がっている。

5000区で確認した堅穴群地区(「2号チャシ地区」)で、「L」字状を呈するチャシ跡が発見された。深さ約0.5～1mの直線状の壕で区画され、規模は約14m×14mである。サロベツ川筋では平成17年度に続き2例目の発見である。立地はサロベツ川方向に舌状にのびる尾根の先端付近にあり、笹原が深くはっきり確認できなかったが、南側に開く面崖式のチャシと考えられる。なお、チャシについては、北海道教育委員会からの指示により、平成21年度の調査終了までは、平成17年度発見したものを「音類1号チャシ跡(仮)」、今年度発見したものを「音類2号チャシ跡(仮)」と仮称して調査にあたることとなった。

堅穴密集地区の詳細測量は、平成17年度から継続している「大曲地区」の堅穴位置および地形測量と「音類1号チャシ跡(仮)」の地形測量、測量基準点としての既存林班杭の測量を実施した。

なお、平成18年4月24日～26日に遺跡の現地確認および幌延町教育委員会との打合せを行っている。

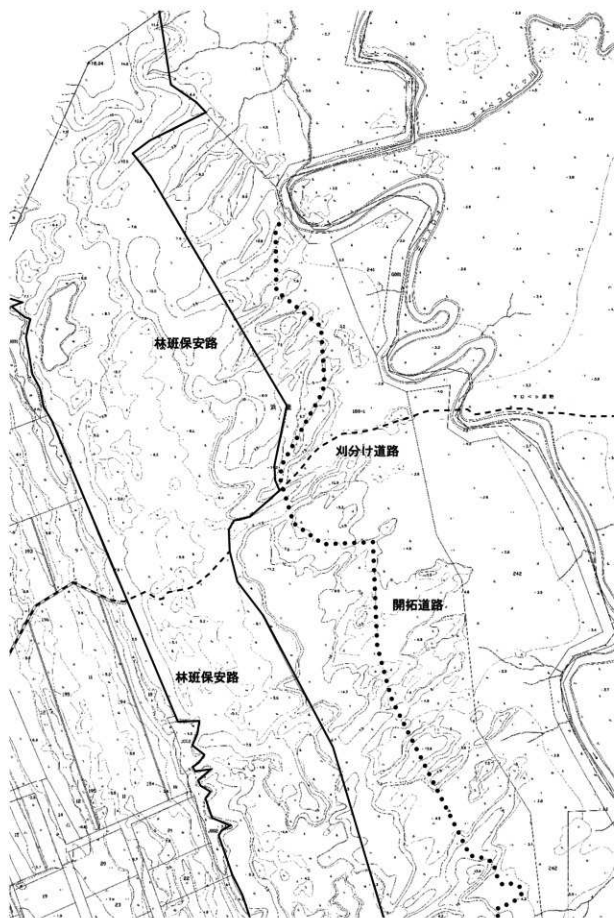


図 I-4 移動の経路等

平成19年度の調査

これまでの調査結果から、継続して表面踏査による堅穴群全体の分布範囲および堅穴位置の記録作業を行った。踏査範囲は4000・3000区である。また、平成18年度の調査で砂丘列の日本海側に堅穴群が確認されたことから、6000区から4000区の日本海側未踏査区の踏査を行ったが、堅穴は確認されなかった。平成17年度に確認済みの堅穴で未記録だったものを含め、位置を記録した堅穴数は70軒で、7か所の堅穴群を確認した。3カ年で確認し位置を記録した堅穴数は663軒である。

堅穴密集地区の詳細測量は、平成18年度に引き続き「1号チャシ地区」の堅穴群測量を行った。また、平成18年度に発見した「音類2号チャシ跡（仮）」および周辺の地形測量を行った。この地区の堅穴測量は平成20年度も継続する予定である。

なお、平成19年4月23日～25日に遺跡の現地確認および幌延町教育委員会との打合せを行っている。

(村田)

表I-1 地区別堅穴群一覧

堅穴群地区名称	軒数	調査区	堅穴 No.	備考
H17-1地区	39	6000	0238～0276	H17確認 H18記録
H17-2地区	60	6000	0280～0339	H17確認 H18記録
H17-3地区	2	6000	0277, 0278	H17確認 H18記録
H17-4地区	3	6000	0134～0136	H17確認 H18記録
H17-5地区	20	6000・5000	0137～0140, 0444～0448, 0451～0461	H17確認 H18記録
H17-6地区	2	5000	0449, 0450	H17確認 H18記録
H17-7地区	7	5000	0229～0235	H17確認 H18記録
H17-8地区	2	6000・5000	0236, 0237	H17確認 H18記録
H17-9地区	39	5000	0194～0228, 0360～0363	H17確認 H18記録
H18-1地区	5	5000	0364～0368	H18確認 H18記録
H18-2地区	27	5000	0369～0392, 0394～0396	H18確認 H18記録
H18-3地区	10	5000	0393, 0397～0402, 0404～0406	H18確認 H18記録
H18-4地区	5	5000	0407～0411	H18確認 H18記録
H18-5地区	4	5000	0417～0420	H18確認 H18記録
H18-6地区	6	5000・4000	0501～0506	H18確認 H18記録
H18-7地区	7	4000	0530～0536	H18確認 H18記録
H18-8地区	17	4000	0513～0529	H18確認 H18記録
H18-9地区	4	4000	1109～1112	H18確認 H18記録
H18-10地区	22	4000	1087～1108	H18確認 H18記録
H18-11地区	5	4000	1082～1086	H18確認 H18記録
H19-1地区	34	4000	1113～1146	H19確認 H19記録
H19-2地区	9	3000	1149～1157	H19確認 H19記録
H19-3地区	2	3000	1147, 1148	H19確認 H19記録
H19-4地区	8	3000	1158～1165	H19確認 H19記録
H19-5地区	7	6000・5000	0149, 0150, 0473～0477	H17確認 H19記録
H19-6地区	9	6000	0141～0147, 0478, 0479	H17確認 H19記録
H19-7地区	5	6000	0468～0472	H17確認 H19記録
大曲地区	190	6000	0001～0092, 0100～0133, 0151～0193, 0466, 0467, 0480～0498	詳細測量 H17～19
1号チャシ地区	81	4000	1000～1079, 1166	詳細測量 H18・19
2号チャシ地区	27	5000	0421～0443, 0462～0465	詳細測量 H19・20（予定）
単独の堅穴	5		0279, 0148, 0403, 1080, 1081	

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の立地と環境

位置と地名の由来

遺跡の所在する幌延町は、北海道留萌支庁管内の最北端、北緯45度線上にあって、東部の山林と広大な原野、海岸沿いの砂丘地帯で構成されている。北は豊富町と、南は天塩川を挟んで天塩町と、東は幌尻山からイソサヌプリ山を経てパンケ山を結ぶ線を分水嶺として北から猿払村、浜頓別町、中頓別町と接する。

町名にもなっている「幌延」は、アイヌ語の「ホロ」「ヌブ」（大きな平原）が転訛したものと言われている。

「幌延町史」によると、遺跡名にもなっている「音類」（オトシルイ）は、オタは砂浜、ウンはそこにある、ルイは路・道で、浜にある路を意味する。豊富町との町境にある三角点付近は「松が岡」と呼ばれるが、松が生育しており、戦後入植した開拓者が名づけた。天塩の川口から北へのびる細長い砂丘地帯は「砂崩れ」と呼ばれている。遺跡のある砂丘の東側を南流するサロベツ川の「サロベツ」は「永田地名解」ではサル・オロ・ベツで茅の・中の川の意である。

遺跡周辺の地形と環境

遺跡は幌延町の日本海側海岸線、浜里地区に所在する。

この地域は、サロベツ川流域にあるサロベツ原野とその日本海側に発達する海岸砂丘列で構成される。サロベツ原野は東西5～8km、南北27kmにわたって広がり、面積は2万ha、その70%を泥炭地が占めるほか、パンケ沼・パンケ沼などの沼沢地があり、日本海に浮かぶ利尻富士を望む景観は風光明媚である（カラー図版1 図版29-2）。また、北は稚内市坂の下から南は天塩川河口まで発達する砂丘列は、40数kmに及ぶ数条からなる砂丘で、そこに発達した森林は、日本の海岸砂丘林でも優れたものといわれている。

砂丘地帯は、海岸（前浜）から内陸にかけて、砂丘列間に存在する湿地や沼により、模式的に以下の3つに区分されている。

- ・第1砂丘帯：塩分を含んだ風と飛砂の影響を最も強く受ける海岸草原。海に面した砂丘の全面と、風下になる背面とでは微妙に環境が違う。
- ・第2砂丘帯：広葉樹を主とする海岸林が成立。特に最前列のミズナラ林は、風の影響を強く受けたため著しい風衝樹形となっており、ここの砂丘林の特殊な景観の一つ。
- ・第3砂丘帯：低湿地や沼を含んだ数本の砂丘列からなり、針広混交林（主要樹種はトドマツ、エゾマツ、ミズナラ、シナノキ、ナナカマドなど）となっている。ここまでくると風の影響も弱まり、主要樹種のトドマツの樹高は20mに達する。

海岸砂丘地帯は、昭和49年に指定された、わが国最北の国立公園である「利尻礼文サロベツ国立公園」に属している。遺跡を含む地域は平成15年に公園区域に編入され、「特別保護地区」に指定されている。また、全城が平成17年にラムサール条約湿地に登録された。

遺跡は、この砂丘列の南半部に立地しており、砂丘帯のもっとも内陸側、現海岸線から1.5kmほど離れた第3砂丘帯にある。砂丘帯の幅は0.5～2kmほどで、最高点は標高19mほどである。堅穴群は現在の音類橋付近から豊富町との境界まで、南北約6kmの範囲に連続と存在していると考えられている。（村田）



図Ⅱ-1 遺跡周辺の地形 (この図は国土地理院発行5万分の1地形図「藤沢内」「豊富」「天塩」「雄信内」を複製、加筆したものである)×0.5

2 周辺の遺跡

図Ⅱ-2は、音類堅穴群が属する幌延町および近隣市町村の遺跡を国土地理院発行20万分の1地勢図「天塩」にドットまたは遺跡範囲で示したものである。採文時代の遺跡およびチャシ跡として登録された遺跡は、遺跡名を表示した。

採文時代の遺跡は、天塩川の河口から稚内市オネトマナイへ至る海岸砂丘上に多く点在する。南から主な遺跡の概略を記す。

天塩川河口遺跡は、昭和40年代後半に一部発掘調査が行われ、現在は「天塩川風景林」の公園として整備されている（図版27-2）。

天塩川が大きく屈曲する右岸砂丘上には浜里堅穴群がある。かつてこの周辺を踏査した、街道重昭氏の「調査メモ」によると「昭和50年、8月4日、川口基線の大川和男氏の漁船で渡る。堅穴10～20みる。深い。一中略一 河面から＋5メートル程の高さ。」とある（図版27-1）。

音類堅穴群が位置する砂丘の日本海側には、浜里2・3遺跡があった。海岸砂丘を北上した、豊富町には豊里遺跡がある。この遺跡は昭和32年に北海道大学大場利夫氏が、6軒の堅穴の発掘調査を行った（児玉・大場 1959）（図版28-1）。豊富遺跡の北側に清明1遺跡がある。現在は乾地化されているが、この辺りがサロベツ湿原の一番北側の地域に属する。

稚内市に入り、抜海に至る海岸線では、境の川右岸1・2・3・4・5遺跡や勇知川左岸1・2遺跡など、小河川の河口付近に遺跡が立地している。

チャシ跡は、天塩川下流の天塩川口チャシ跡と稚内市オネトマナイのオネトマナイ左岸チャシがある（図版28-2）。

(村田)

表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧

市町村	遺跡名	登録番号	性格	時期	立地	標高	所在
幌延町	音類堅穴群	G-09-001	集落跡	採文	サロベツ川右岸の砂丘列	5～15m	字里国森林174-176林道
幌延町	浜里堅穴群	G-09-002	集落跡	採文	天塩川右岸の砂丘列	5m	字里国森林176林道
幌延町	南下部遺跡	G-09-008	遺物包含地	縄文(晩期)、採文	奥オネベツ川右岸段丘、支流瀬田点付近	7m	字下部271-112か
幌延町	中ノ島遺跡	G-09-010	遺物包含地	縄文(晩期)、採文	オネベツ川右岸段丘	3m	字下部300-3
幌延町	浜里2遺跡	G-09-014	集落跡	採文	海岸に沿った砂丘上	5m	字浜里100-1、102
幌延町	浜里3遺跡	G-09-015	集落跡	採文(晩期)	海岸に沿った砂丘上	7.5m	字浜里30
天塩町	天塩川口遺跡 (KW-1)	G-08-001	集落跡	縄文、縄文、オホーツク、採文			字川1280-111か
天塩町	天塩川口チャシ遺跡	G-08-002	チャシ跡	アイヌ	舌状丘陵の先端に位置、トウツナイ川右岸	5m	字川12254-1
天塩町	作道1遺跡	G-08-006	集落跡	採文	天塩川左岸段丘	9～10m	字作道7799地先
天塩町	川口基線1遺跡 (KW-2)	G-08-029	集落跡	オホーツク、採文	砂丘	5m	字川14524
天塩町	トウツナイ右岸遺跡	G-08-024	集落跡	採文	海岸砂丘 トウツナイ川右岸	3～5m	字川12016-112か
天塩町	トウツナイ左岸遺跡	G-08-025	集落跡	採文	海岸砂丘 トウツナイ川左岸	3～5m	字川13382-112か
天塩町	天塩川口チャシ跡遺跡	G-08-037	集落跡	採文	天塩川左岸砂丘	5～6m	字川12803-112か
稚内市	境の川右岸1遺跡	H-01-077	集落跡	採文	海岸砂丘	5m	大字秋海村字オネトマナイ233-1～3
稚内市	境の川右岸2遺跡	H-01-078	集落跡	採文	海岸砂丘 (第2砂丘列)	5m	大字秋海村字オネトマナイ海浜地
稚内市	境の川右岸3遺跡	H-01-079	集落跡	採文	海岸砂丘 (第2砂丘列)	5m	大字秋海村字オネトマナイ海浜地
稚内市	境の川右岸4遺跡	H-01-080	集落跡	採文	海岸砂丘 (第3砂丘列)	5m	大字秋海村字オネトマナイ234-2
稚内市	境の川右岸5遺跡	H-01-081	集落跡	採文	海岸砂丘 (第3砂丘列)	5m	大字秋海村字オネトマナイ234-2
稚内市	オネトマナイ川左岸チャシ跡	H-01-083	チャシ跡	アイヌ	オネトマナイ川と道地に面した舌状丘陵の先端	20～25m	大字秋海村字オネトマナイ234-5
稚内市	勇知川左岸1遺跡	H-01-084	集落跡	採文	勇知川沿いで、旧勇知川跡へ続く段丘上	5m	大字秋海村字下勇知73-2
稚内市	勇知川左岸2遺跡	H-01-085	集落跡	採文	勇知川河原段丘のミズナ林内	5m	大字秋海村字下勇知2300-1
豊富町	豊里遺跡	H-07-001	集落跡	縄文(早期、中期)、縄文、採文	サロベツ川右岸 丘陵上	8～20m	字アサハベシバ6548-112か
豊富町	安波遺跡	H-07-006	集落跡	採文	豊里北岸 台地上	8～10m	(字上サロベツ)
豊富町	清明1遺跡	H-07-008	集落跡	縄文、採文	砂丘	10～15m	字アサハベシバ7295-112か
豊富町	サロベツ遺跡	H-07-014	集落跡	採文	サロベツ川右岸段丘跡	5m	字上サロベツ292-9032か